濱田君の追憶

二十歳の夏に第三高等學校に入學して、二年先輩としての濱田君を初めて知つてから、昨年夏に至るまでの四十年近い歳月を、不思議な程相離れることなしに、例へば鎖で結ばれて進む列車のやうに、同じ軌道を君の直後に引つついて歩いて來た。高等學校を出てからは同じ歴史の課程を、同じ東京帝國大學に修め、同じやうな東洋文化の研究に從事して、同じ年に京都帝國大學に奉職する同僚となつてから三十年、最後の君の公職までも今の自分に於て承け繼ぐ破目になつたのは、盡きせぬ緣とも不思議の運命ともいふべきであらう。四十年近くも前後隣接して走つた列車であつて見れば、假令仕切りの硝子の開閉は常ならぬものがあつたにしても、お互に大概の内幕は知り悉してゐた筈だ。それからそれへと追憶の糸は手繰れども手繰れども綿々として盡きぬ。

濱田君の人となりを一言にして言ひ表はし得るやうな適當な言葉は自分には見つからない。それ程に君は多くの特徴の持主であつた。非常に感情に鋭く趣味の豐富な人であつたと共に、聰明な理智の人でもあつた。沈滯を嫌つて波瀾を喜び、好んで議論を上下したが、時には爭論の埒外に身を躱して、洒脱の三昧に入ることもあつた。觀て居るものをしてひや〳〵させるまでに押の一手で他人を取つ締める強い人であつたと共に、持つて行き方に依つては容易に讓りもする調子の好い人でもあつた。大まかな太い線の人である反面に、極めて纖細なところにまで注意